岡谷市史編さん室だより『覧古考新』No.19
2024(令和6)年　8月
岡谷市教育委員会生涯学習課
岡谷市史編さん室　編集・発行
岡谷市中央町1-11-1 イルフプラザ3F
TEL 0266-78-8455
WEBはこちら

覧古考新：古い事柄を顧みて、新しい問題を考察すること
～岡谷の歴史を深く思い、岡谷の今を重ね、岡谷の未来が拓けるような新しい市史をめざして～

今から１３００年前　岡谷は「諏訪の都」だった　～ 覧古考新 考古編 ① ～

岡谷市史上巻が昭和48年に発行されて51年が経過しました。

上巻発刊後、多くの発掘調査が行われてきました。主なものは、中央道西宮線関連諸遺跡、橋原遺跡、梨久保遺跡、中央道長野線関連諸遺跡、国道20号バイパス関連諸遺跡、山の手区画整理事業に伴う諸遺跡、花上寺遺跡、志平遺跡、樋沢遺跡、岡谷丸山・海戸遺跡、間下丸山・禅海塚遺跡など大規模なものです。

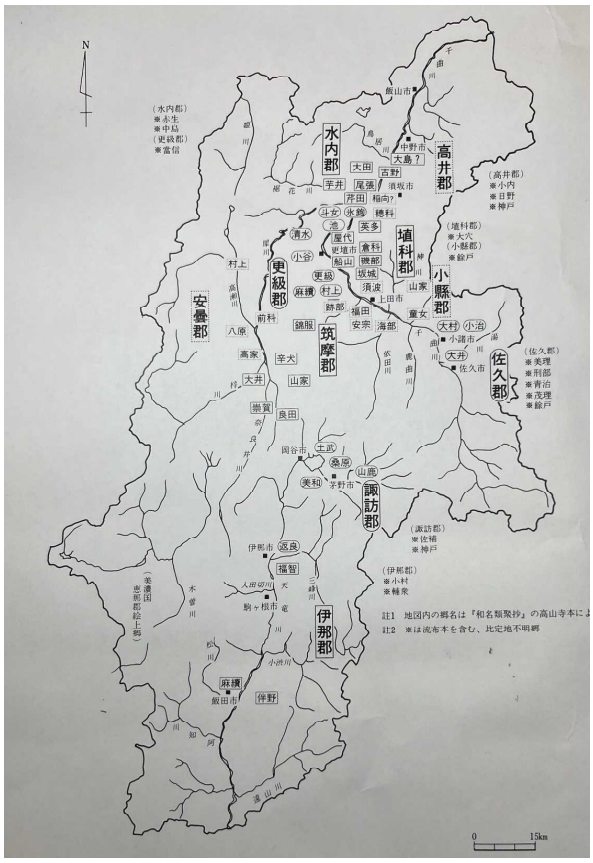
今回は、考古編として榎垣外遺跡を取り上げます。

榎垣外遺跡は市内随一の規模を持ち、令和5年度現在、312次の発掘調査を行い、昭和40年から平成18年までの発掘調査をまとめた報告書を平成20年に刊行しました。

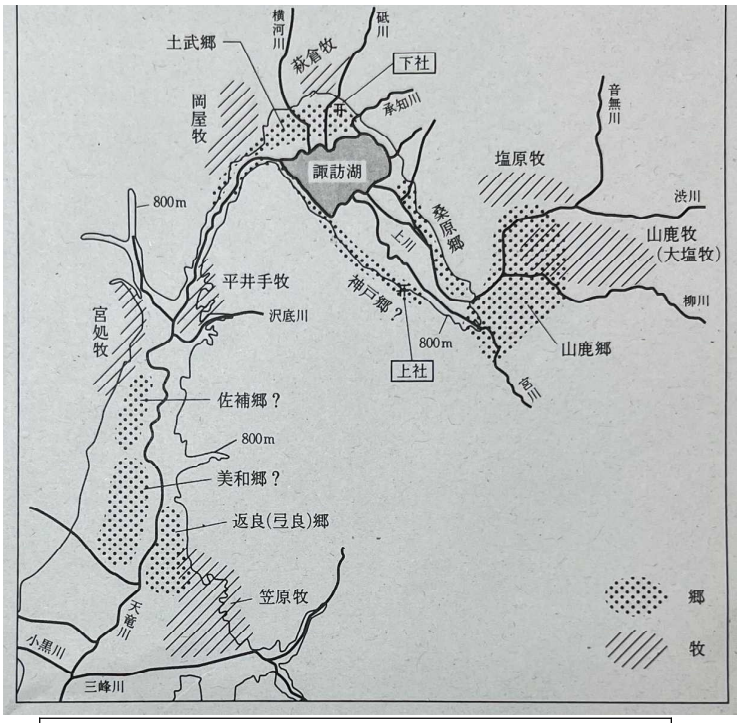
岡谷市長地一帯にあったこの遺跡は、律令期（およそ8・9世紀）の郡家（ぐうけ：郡に設置された国の役所）であったと考えられ、また、西暦721(養老5)年～731(天平3)年の10年間、信濃国から分立した「諏訪国」(続日本紀)の国衙（こくが：国の役所）ではなかったかと推定されています。

当時の諏訪郡は七郷あり、現諏訪郡から辰野町・箕輪町・伊那市の一部を含んでいました（第2図）。

「掘立柱建物址（以下、「掘建」と略す）」は律令制を象徴する建物で、岡谷市榎垣外遺跡に集中していて、他の地域にはほとんどみられません（第5図）。また、都の匂いのする「緑釉陶器」（第14図）も榎垣外遺跡で多く発見されています。2021（令和2）年は諏訪国建国1300年でした。1300年前、榎垣外遺跡は諏訪郡・諏訪国の中心地であり、「諏訪の都」として大いに賑わっていたのです。



比定地が全く不詳である郷には「※」を付してある。

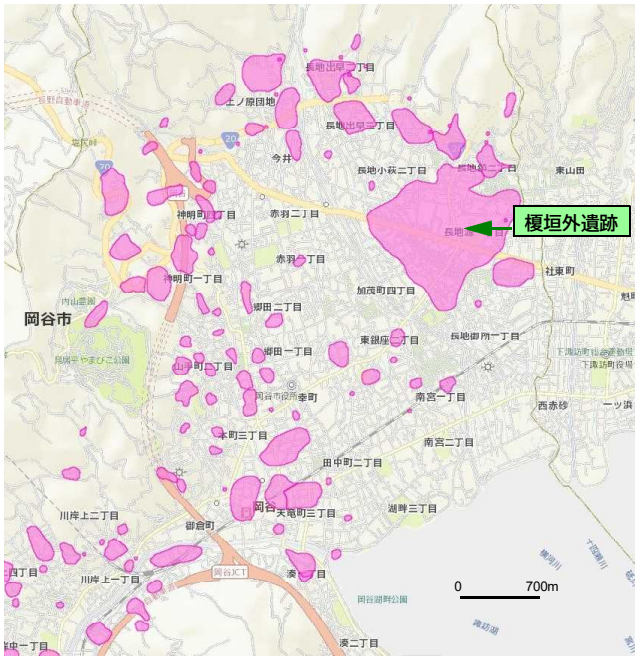


第２図　「諏訪の郷と牧の分布」
出典：「諏訪市史　上巻」p.640　1995 年 諏訪市発行

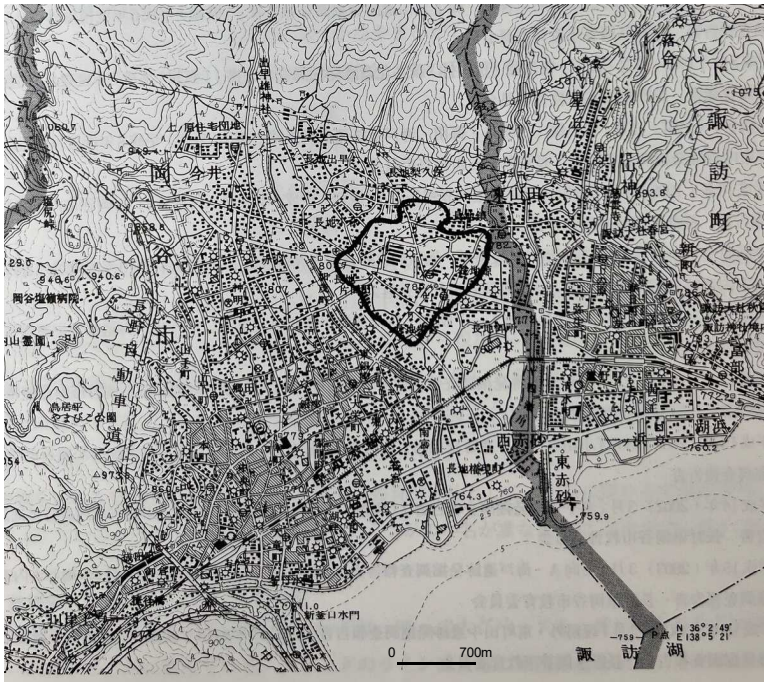
諏訪郡には7つの郷があったことは文献に記述あり、山鹿・桑原・神戸・土武・佐補・美和・返良（弓良）である。郷の領域が不確定ものについては「？」を付してある。

第１図　「信濃国十郡」(信濃国古代郡郷の分布推定図)
出典：「長野県屋代遺跡群出土木簡 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」p.207　1996 年長野県埋蔵文化財センター編

えのきがいといせき
榎垣外遺跡の位置



図出典：岡谷市埋蔵文化財包蔵地図
2024年 市立岡谷美術考古館作成

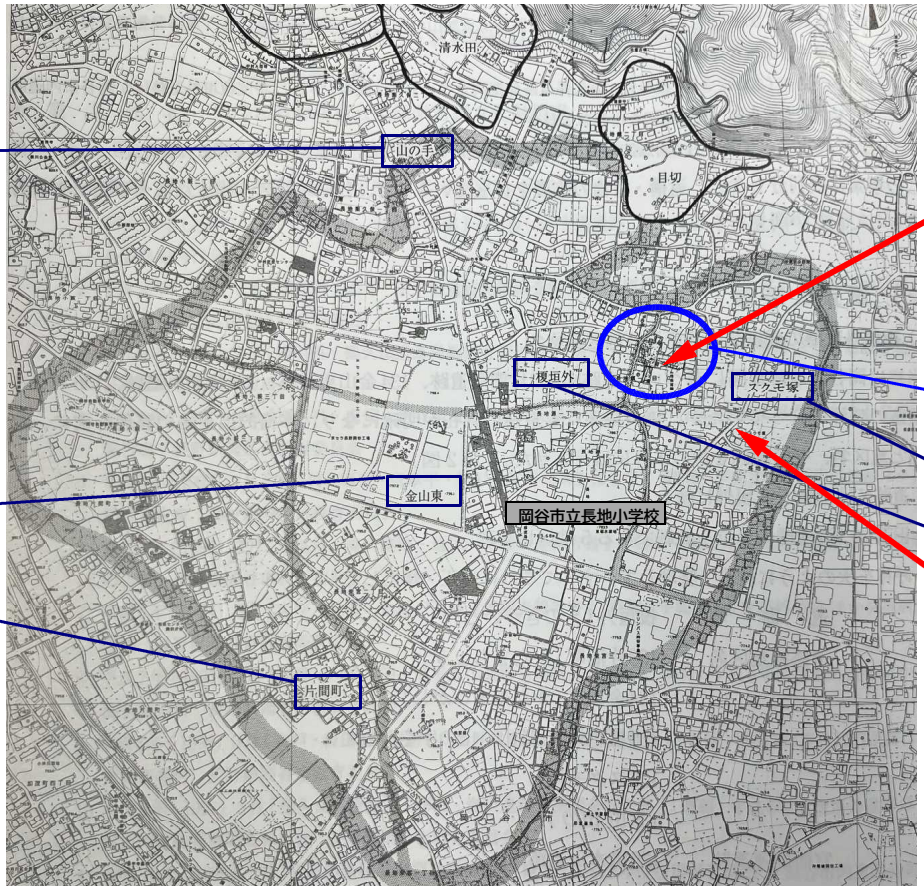


地図中太枠が榎垣外遺跡

図出典：「榎垣外官衙遺跡」p.1
平成20年 岡谷市教育委員会 生涯学習課分室埋蔵文化財整理室 発行

榎垣外遺跡の官衙（かんが）跡（長地保育園内の碑）

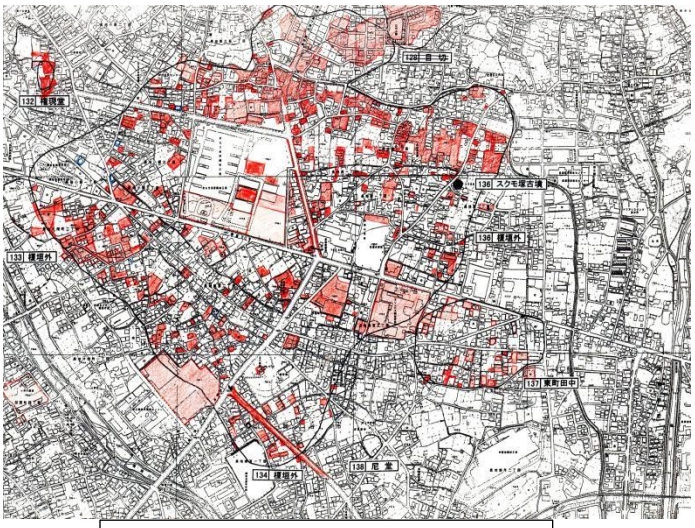
官衙：官庁・役所のこと



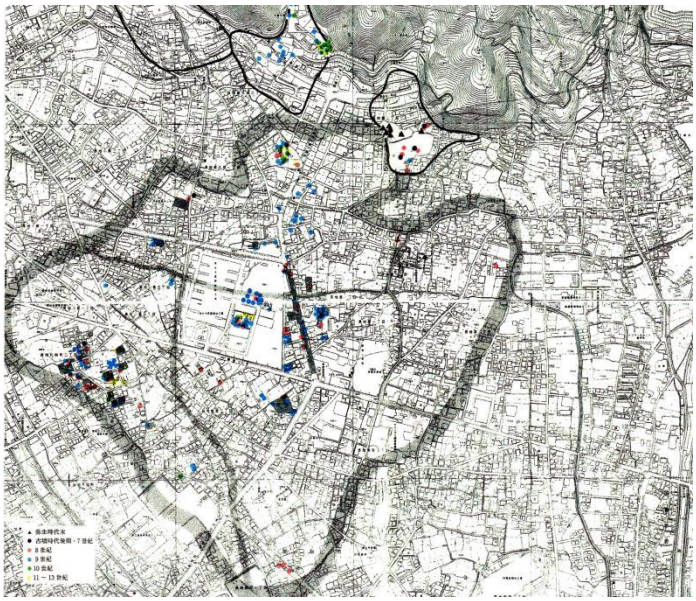
榎垣外遺跡の範囲と地区割

「須久茂墳」（スクモ塚古墳の碑）

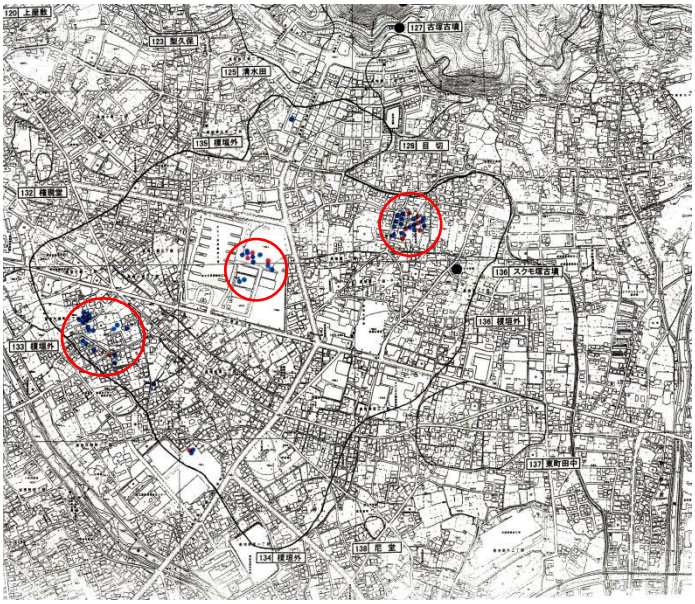
図：「榎垣外官衙遺跡」p.4（平成20年 岡谷市教育委員会 生涯学習課分室埋蔵文化財整理室 発行）に加筆して市史編さん室作成



第 3 図　榎垣外遺跡発掘調査地点（赤塗り）



第 4 図　竪穴住居跡分布図　現在 378 棟が確認されている



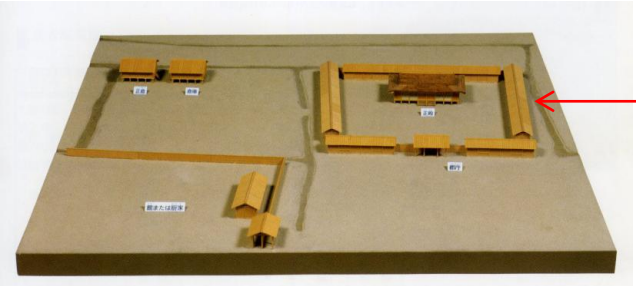
第 5 図　掘建分布図　68 棟が発見され、スクモ塚地区＝政庁院、京セラ工場内、片間町地区＝有力氏族居宅域の 3 か所に集中する

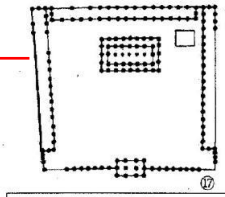
第 6 図　遺構（住居跡、掘建）検出状況
ローム層に黒色土が落ち込んでいる

第 7 図　竪穴住居跡の完掘状況
この時期は「隅丸方形」となり、室内にカマドが造られる

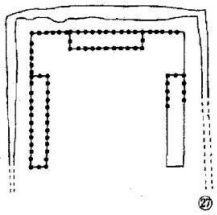
第 8 図　掘建柱穴群の完掘状況
これらの柱穴の配置から、掘建を想定・検出する

図 3.4.5 出典：岡谷市生涯学習課分室埋蔵文化財整理室作成
図 6.7.8 出典：岡谷市生涯学習課分室埋蔵文化財整理室撮影





岡遺跡（近江国栗東郡衙）
52×50m
700～900（200 年間）

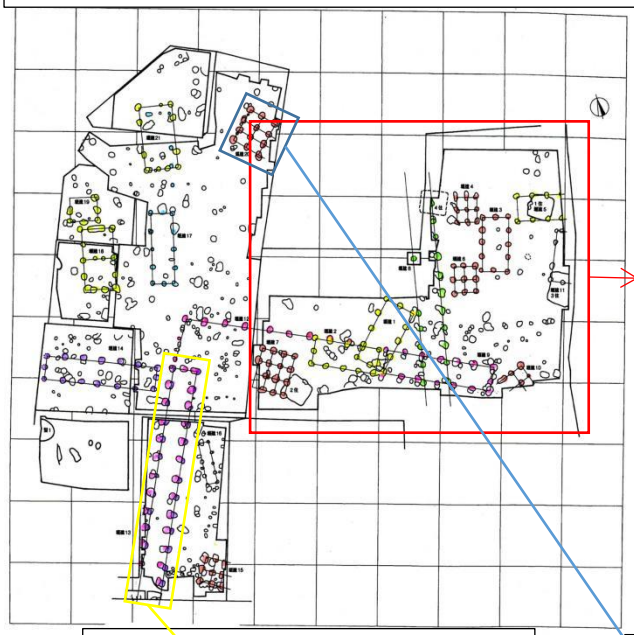


宮尾遺跡
（美作国久米郡衙）
（35）×33m
（650）～（900）

左　「岡遺跡模型」出典：滋賀県栗東市歴史民俗博物館　蔵

中・右図出典：「古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編」2004 年独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　p.162

第 9 図　郡家類例　郡家の類例は全国に 50 か所弱確認されているが、岡遺跡例や宮尾遺跡例が榎垣外遺跡に類似している。



第 10 図　正庁院遺構全体図

第 11 図　昭和 57 年調査　遺構全体画像（現長地保育園）

第 12 図　掘建側柱建物柱穴列＝長舎
柱穴が重なり、建替があったことが判る

第 13 図　掘建総柱建物柱穴列＝正倉

掘建には、側柱建物と総柱建物があり、側柱建物は正殿・曹司・館・厨などに使用される。総柱建物は税などを保管する倉庫で、税の徴収は郡家の役目であり、正倉は郡家にあるが国衙にはない。

郡家（ぐうけ）＝郡衙

図 10：岡谷市生涯学習課分室埋蔵文化財整理室作成

図 11.12.13：岡谷市生涯学習課分室埋蔵文化財整理室撮影

須恵器坏蓋出土状態

土師器坏・皿出土状態

転用墨壺（黒・朱墨がみられる）

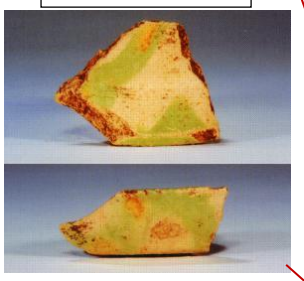
鉄鎌出土状態

帯金具（丸鞆）

帯金具

刀子（ナイフ・包丁）

三彩陶器盤



鉄斧

緑釉陶器唾壺

帯金具（巡方）

陶硯（圏足円面硯）

紡錘車

麻などの繊維を糸にする道具

八花鏡

「美濃国」刻印のある坏蓋

須恵器坏の転用硯

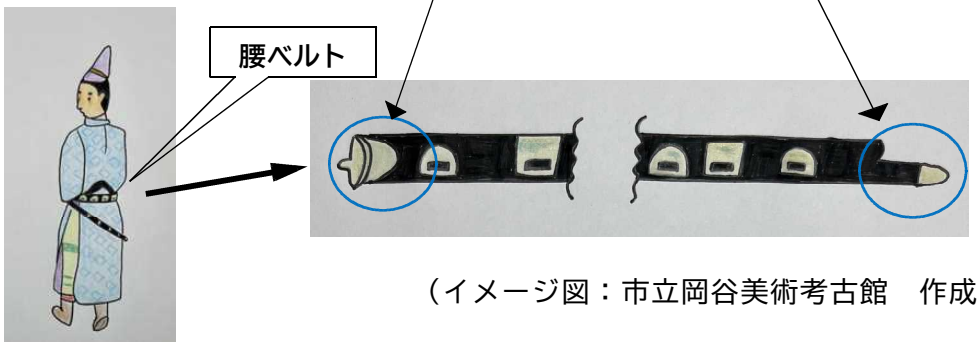
第 14 図　出土遺物位置図

全写真：岡谷市生涯学習課分室埋蔵文化財整理室撮影

「覧古考新　考古編」用語案内

帯金具（おびかなぐ）

役人の身分を表す金具。腰ベルトに取り付ける「巡方」と「丸鞆」がある。
ベルトには、絞め具の絞具（かこ）＝バックルと、端に付ける蛇尾（だび）が付く。
役人の位により大きさがかわる。



（イメージ図：市立岡谷美術考古館　作成）

硯（すずり）

当時、文字の書ける人は役人か宗教関係者であった。文字は墨で書かれているが、墨を磨る硯は、ほとんどが須恵器製でこれらを「陶硯」という。陶硯には、圏足硯、獣足硯、風字硯ほかがあるが、これらは、出土数量や形から注文制作品と思われる。榎垣外遺跡では14点の陶硯が発見されているが、県内では二番目に多い数量である。最大は伊那郡衙の恒川遺跡群で100点を超える。硯は特注品のため手に入りにくく、そのため須恵器や灰釉陶器などを代用している。また、墨壺（パレット）としても使用されている。

刀子（とうす）

刀子は、一般家庭では包丁などとして使われ、役人には必需品とされた。それは、紙がごく高級であったころには、木の板に書いたため、その（木簡）製作や、文字訂正をするために刀子で板を削る、木簡を廃棄するときに切刻むためなどの道具であった。

「美濃国」刻印（みののくに　こくいん）

この刻印のある須恵器は、美濃地方の老洞窯で焼かれたこと、また、焼かれたのが8世紀前半と判明している。須恵器の流通やその時期を特定するために極めて重要な史料である。

鉄器（てっき）

第14図中には、鉄鎌、鉄斧、紡錘車があるが、これらは、生業に関わる鉄器であり、その出土地域も一般集落に多い。庶民は、布を織ったり、木を切ったり、麻や草を刈る生活をしていたと思われる。

八花鏡（はっかきょう）

奈良平安時代において使用された銅鏡は、時期により特徴的な形をしている。8～9世紀には八花鏡という花びらのような形のものが出土し、10世紀には八稜鏡という小さな突起のある鏡となる。